

法である。彼が多くの俗語を駆使し、よく有機化せしめてゐるのも、見方によつては、やはり感に粘つたので、個性發揮の態度だと云へる。

○

彼の本質の他の一つは、惑溺性である。そして其れには多分の趣味性を加味してゐる。この趣味性豊かな惑溺性は、彼をして抒情詩人であると同時に、對象を丹念に堀り穿つ觀照の詩人たらしめた。その點に於て彼には一面レアリスムの素質がある。後年の子規が客觀的歌想の歌と稱し、寫生派の範を示した繪畫的の作は、即ちこの觀照の作に當り、曙覽の歌集の半ばを占めてゐる。子規の寫生は、西洋畫の寫生主義に刺戟されたのであらうが、曙覽のは漢詩の影響があつたのであらう。彼は又聯作の形で題畫を試みてゐる。しかも、繪畫の餘意を詠はうとした作は少く、丹念に寫生し、描寫してゐる。之は勿論彼の描寫的傾向に基くのであるが、漢詩の影響もあらう。又、屏風の繪を取扱つた新古

今の描寫風の歌の影響も考へられてくる。彼の歌論をよむと、歌に多様性を與ふべきを唱へてゐる。その點も子規と似てゐる。そして其れも亦彼を客觀描寫に赴かしめた一因子であらう。

うつぶしに多くの植女立ならび笠もたもとも泥にさし入る

枯のこる莖うす赤きいぬたでの腹ばふ庭に霜ふりにける

何れも新味をおびた、個性をあらはし得たよい描寫である。しかし、一半の作は事象に即し過ぎ、または説明に墮して弛緩してゐるのは已むを得ない。

○

曙覽の抒情の作は、初期のものは意匠を凝らし過ぎて機智に墮したのもあるが、晩年の作には口を衝いて出たものがあり、さうしたものが私には親しい

いざ來ませ通雄が家は酒もありあるじに乞ひて飲て別れむ

途中で出會つた友への挨拶の歌として、物に拘泥しない、のつばな彼の一面

がをどつてゐる。佳作と云はざるを得ない。しかし、彼は本來凝り屋さんである。暇に任せて歌をひねくり廻す。かうしたものは抒情の作にもあるが、當然の事として描寫の方面のものに多い。そして往々失敗にをはつてゐる。

狛君の別墅二樂亭

廣き水眞砂のつらに見る庭のながめを曳て山も連る

さんさんの骨折が報いられてゐない。凝つては思案にあまるといふところである。

○

彼の個性の深さは、どの程度に達してゐたか。惑溺家であり凝り性である彼は、一面に於てあり餘る程の餘裕をもつてゐる。そして其れがころよいユーモアとして顔を出して来る。

つらなれる山見てすがる欄干に肝つぶせて飛ぶ魚のおと

あるじをもここにかしこに追たてて壁ぬるをのこ屋中塗りめぐる

例を引けばさりのない事である。をかし味のある餘裕は、確かに彼の本質の一面である。そして歌に没頭して家庭をかへり見なかつた彼の環境は、ますます彼のかうした本質を助長せしめたらうと思はれる。勿論一閑人としての彼の餘裕には、今日のわれわれには感服出来難い點が少くない。しかし彼には全的に物を看得るところがある。さういふ方面の餘裕には敬意を表せざるを得ない

○

いつたい、彼の思想は當時の他の國學者がさうであつたやうに、いはゆる古學思想で、神道に根ざしてゐる。しかし、彼の歌つてゐる神が果して純粹の神道の神であらうか、その方面の知識をもたない私には疑ひなきを得ない。例へば

體といふ宅はなるれば天地と我の間に垣一重なし

天地の間に隔なき魂をしばらく體のつつみをるなり

物皆を立つ雲霧と思へれば見る目嗅ぐ鼻幽世と同じ

幽現一重の蟬の翼もさへず人の臭もたぬ吾まなこには

曙覽は宣長の孫弟子である。そして宣長を尊敬してゐる。宣長の説いた神道は果してかうしたものであらうか。識者の高教を仰ぐの外はないが、卒然として之等の作をよむと、佛教思想又は宗儒の理學の思想から影響されてゐると云はざるを得ない。

○

とにかく彼には宗教的情操と思はれる背景がある。志を果さずして逝つた幸山長遠を悼む聯作中の一首に

書き繼む人またありて汝が功績つひには全くならむ行する

がある。人一人を問題としてゐるのではなく、大きく云へば天地を問題として

ゐる。さう見てくると

夕煙今日はけふのみたてておけ明日の薪はあす採りてこむ

も消極主義とのみは云へない。之等の作やしらみの聯作に出て來る曙覽は尊敬に値ひすると云はざるを得ない。

○

彼の歌のリズムはおほらかで、ゆつくりしてゐる。そして描寫の線が太い。しかし、同じ太くあつても、憶良などのやうに突つ張つてつよく、惻々として人に逼つてくるやうなところがない。親しむべく圓く、そしてわるくするとその線條がたるんでくる。之は彼の本質でもあるが、表現生活に没頭してゐて生活の萎微してゐた點もあらう。そしてその線條が淨化され切つてゐない。それが彼の藝の大きな弱處ではあるまいか。そして句破れや句またがりが割合に多くそれが目立つところがある。壓搾力が足りないのである。(昭和四・九)

## 曙覽の連作について

一昨年の一月から、毎月「朝の光」竝に引續いて、本誌（國歌）上に發表して來た「曙覽の合評」も、本號を以て、回を重ねること、二十三回に及び、近く結末を見るに至つた。彼の作の本質、特色、傾向、その他諸々の注意は、その都度能ふ限り詳述することを怠らなかつた積りである。されば今更ら、拾遺的の意味に於て、書いて見度いと思ふことはないのであるが、彼の著しい特色の一つである連作についてののみは、之を綜合的に觀ておくことの必要を感じるのである。之は一面から言へば、彼がどの程度の連作を作つてゐたか、彼がどんな苦心を連作の上に拂つてゐたかを知るためであるが、又他の一面から言へば、世上で言はれてゐるやうに、彼の連作が果して、自覺的に爲されたもので

なかつたか、どうかを考察することになるのである。彼の如き不言實行家の作に對しては、後學のわれわれが、其れだけの勞に服するの義務があるやうに思はれるのである。之が此の一文を草する主なる理由である。

先づ私は、彼の連作を見る準備として、彼の自選家集なる志濃夫廼舎歌集の全部に互つて、一題の下に、二首以上の作を收めたものの凡てを抜き出して見た。そして其れらの殆んど凡てに於て、一題の下に收められた幾つかの作が、相互に何等かの關聯をもつてゐるのに驚いた。之は在來の他の歌集には見られなかつた傾向であつて、明かに彼の作歌態度が連作に傾いてゐた一證であると思ふ。私は更に之等のうちから連作として差支なからうと思ふものを選んで、次の四十六種を得た。尙ほ此の外にも迎へて採れば、連作と言ひ得るものもあり、又一方、私が連作と見做したものの中にも、一般からは賛成を得難いものがあるかも知れない。しかし、大體に於ては、選擇を誤つてをらぬ積りである

兎に角四十種内外の連作があると見てよいやうである。之は彼の作に、連作の多いことを承知してゐた私に取つても、餘りと云へば意外の事であつたのである。少しく煩はしいが、私が連作と見做したものを、ひとわたり、羅列して見やう。

- 1、閑居月(二首)
- 2、父の十七年忌(二首)
- 3、幽居雪(二首)
- 4、牧笛歸野(二首)
- 5、しらみ(三首)
- 6、「人みな」の二首「松戸にて口より出づるままに」(五首)の終りの二首
- 7、「歳々にさかゆく御世の」(三首。詞書を添ふ)
- 8、「日のひかり」(八首。有名な採鑛冶金の歌(7)の續きでその間に詞書あり)
- 9、「衣手の飛驒は」(三首(7)(8)の續きで、其の間に歌も詞書もある)
- 10、「きのふまで」(三首。詞書あり)
- 11、川千鳥(二首)
- 12、をりにふれて詠みつづける(三首)
- 13、「顯はさむ」(五首。詞書あり)
- 14、「品さだめいひこころみて」(二首。詞書あり)
- 15、「壁くぐる」(二首。詞書あり)
- 16、「撫やまぬ」(四首。詞書あり)
- 17、つれづれなるままに(三首)
- 18、「一部の文かきをへむ」(四首。長い詞書あり)
- 19、「みめぐみの露餘りある」(二首)

- 20、ある時(二首)
- 31、河津君の許に(二首)
- 22、青柳風靜(二首)
- 23、詞書あり)
- 美人撲蝶圖(三首)
- 24、青松白鶴(二首)
- 25、萬竹圖(四首)
- 26、背面美人圖(四首)
- 27、松風醉歸圖(二首)
- 28、戯れに(四首)
- 29、さびしかりける日(二首)
- 30、山家積年(四首)
- 31、青木双鶴翁を弔ふ(二首。詞書あり)
- 32、「人麿の御像のまへに」(十首。詞書あり)
- 33、ひとりごと(二首)
- 34、河野氏(二首。詞書あり)
- 53、そぞろによみいでたりける(九首)
- 36、失題(七首)
- 37、「御めぐみの露いただかむ」(二首。詞書あり)
- 38、「待どほにさても有かな」(二首。詞書あり)
- 39、「ひとりぞと」(二首。ある時四首の終りの二首)
- 40、「隠士も市の大路に」(二首。詞書あり)
- 41、紙漉(七首)
- 42、豆腐歌(二首)
- 43、病にわづらひける時(四首)
- 44、示人(四首)
- 45、「湛へつる器の水に」(四首。詞書あり)
- 46、野村恒見に(二首)

注意 此の表中「」を附したのは、題がなくて、長い詞書が添つてゐるために、便宜上、第一首の一二の句を記したのである。

この表を一覽して、先づ何人の注意をも惹くであらうと思ふことは、曙覽の連作の大部分が、一聯僅かに二三首よりなる、極めて短かいものである事であ

る。之は現代の嚴めしい長篇の連作に慣らされた者の目には、甚だ物足りぬ感じを起させるかも知れない。或は斯くの如きものは、連作の胞芽たるに過ぎないと言ふ議論も豫期せられる。しかしながら連作として成功したか否かは、その形式の長い短かいにあるのではなく、一篇が有機的集合體として、全的調和を保つてゐるか否かにあるのであるから、連作の長短は、直ちに連作の價値の標準とはならないのである。今、試に(18)「一部の文かさをへむ」の一聯を引いて、此の問題を研究して見やう。此の連作には、長い詞書が添つてゐて、それには曙覽の歌の弟子であつた松岡幸山長遠と云ふ篤學な醫者が、日本固有の醫道に關する著書を志し、全部十卷を以て完了す可きものを、七卷迄で書いて他界したことが記してある。歌は一聯四首より成つてゐる。

一部の文かさをへむ程をだにこの長遠を世には在らせて

一ともに満ちたらずとてなげかめや世に無き文を書きし七卷

書き繼む人また有りて汝が功績つひには全くならむ行すゑ

えみし唐土きたなき國の術からぬくすしの書を一人書出づ

此の一聯の作を讀むと、故人の靈代の前に坐つた作者の心理的過程が、如實に寫されてゐるのを感じる。即ち差別界より平等界に入り、再び平等界を通して差別界に入つてゐる。四首相互の間に關聯があり、連続があり、調和があるそして一つの小宇宙を、そこに實現させてゐる。連作として完備したものだと云へやう。窪田氏は此の連作を評して(朝の光第四卷第五號)「第一首で天命を怨み、第二首で天命に安んじやうとし、第三首で、全く天命に安んじえてゐる。その一方では、初めは長遠といふ一人の人を對象とし、次ぎには、人生に於ける事業を對象とし、最後には、人生そのものを對象としてゐることに心附く。第三首に見えてゐる曙覽は、人生を對象としてゐる曙覽である。随つて功業も、誰がするといふのが問題ではなく、誰でもしさへすればいいのである」

又「第四首に至つて、重ねて長遠に立ちかへつて物を云つてゐる。しかし、第一首の時の長遠その人に即して云つたのはちがつて、人生のうちの一人の人として見た長遠を相手としてある。即ち離れて見た長遠である。激情がしづまつて、静かに觀た長遠である。ここに至つて曙覽は初めて、一人の人としての長遠の特色を捉へたのである。連作として見て、此の一首はやや附録のやうな感があるが、しかも此れがなくては、一聯として、やはりをさまりの附かない感がある。要領のいい方法といふべきであらう」等の言をなしてゐる。此の連作は短かいものであるが、連作としての生命は、豊かに湛へられたものであることは、氏の評言に盡きてゐると思ふ。この一聯の外、完璧の有機體と云ひ得るものは、いくらも擧げることが出来るが、連作として最も短かい、二首より成るものの數例を引いて、讀者の鑑賞眼に訴へやう。

(2) 父の十七年忌に

今も世にいまされざらむよはひにもあらざるものをあはれ親なし  
髮しろくなりても親のある人もおほかるものを吾は親なし

(3) 幽居雪

薄しろくなりてたまれる雪の上も汚さで一日見る庵かな  
跡といふものはあらせぬ雪のうへに心をつけて獨り見るかな

(15)

壁くぐる竹に肩摩る窓のうちみしろぐたびに彼も枝振る  
膝容るるばかりもあらぬ艸の屋を竹にとられて身をすぼめをり

(25) ある時

何ごとも時ぞと念ひわきまへてみれど心にかかる世の中  
忘れむと思へどしばし忘れぬ歎きの中に身は果てぬべし

(29) きびしかりける日

ほしかるは語りあはるる友一人見べき山水ただ一ところ  
かたる友見べき山水一つづつそれだにあらぬ此世此くに

幽世カミヨに入るとも吾は現世に在るとひとしく歌をよむのみ

歌よみて遊ぶ外なし吾はただ天にありとも地にありとも

之等はその一斑に過ぎないが、一首一首の関係が如何にも緊密であると思ふさうして、その感動内容の充實に於て、長い連作を以てしたものを凌いでをるものさへあると思ふ。一體記紀や萬葉にある連作の大部分は、何れも此の種の短かいものである。連作發達史の上から見れば、此の種のもは従つてブリミチープのものであるとも云へやう。しかし、一方から云へば、ブリミチープのものであるだけ、そこに、連作の本質に關して、何等かの暗示があるのでないかとも思はれる。一篇の長詩に比すべき長い連作の大部分が、散文化にをはることや、長い連作をする場合でも、或は章をわかち、或は詞書を挿んで、讀者の倦怠に備へる用意のいるが如きは、此の邊の消息を語つてゐるものではあ

るまいか。

私はここで連作の詞書の問題に言及したから、曙覽の連作について、少しく詞書の詮議をして見やうと思ふ。彼は好んで、連作にも詞書を附けた一人である。前に引用した長遠の連作にも、長い長い詞書が添つてゐる。それについて、合評に於て、私は(朝の光第四卷第五號)「連作が散文になり易いと云ふ非難を今日耳にするが、曙覽は疾くの昔、さう云ふ缺陷を見抜いてゐる。さう云ふ缺陷は、思ふに事件の推移を寫すからで、曙覽は、さう云ふものは、詞書に托して了つて單に自家の感懐のみを述べてゐる。吾々によきヒントを與へるものである云々」と言つてゐる。今見ると、事件の推移を寫すから、散文化するとは、一概に云ひ得ないが、此の作に限つて云へば、私の言は矢張り正しいと思ふ。猶ほ窪田氏は「この一首(第四首目の歌を指す)を見ると吾々の連作といふものは、此の歌を初めの一首とし、はし書きにあることを歌として行き



人によつては、前の歌と後の歌の繋ぎに、主格のない、何を云つてゐるのか分らない歌までも詠んでゐることを思はせられる。曙覽の連作を見ていいと思ふと、さうした風の歌は、今更ながら問題になつて来る」と言つてゐる。

嘗て石原純氏は、短歌連作私論に於て「私は連作に於てはこの詞書を或る程度まで、其の内容に取り入れて、そこに背景を滲み出させたいと望んでゐる」(アララギ第十三卷第四號)と論ぜられたことがある。さうして、實際、それが當時(大正九年)の一般の連作態度であつた。しかしながらその結果は果して、どうであつたか。無数の記述的短歌の簇出は、その因の一半を、ここに發したのではあるまいか、従つて、連作の散文化の一因は、ここにあつたらうと思はれる。勿論、連作と云ふ詩形の、外形的齊整を求むる眼からは、當時の注文は、少しも無理のないことであるが、短歌は、その本質から云つて、此種の雜役に服するのを肯んじなかつたのであらう。兎に角、歌壇は、ひたぶるの連

作に倦怠して、今日を中心興味は、再び孤立短歌に向ひつつあるやうである。ひさしく蹂躪されてゐた短歌の本質が、再び芽を吹いて來たのである。此の間の経過を心のうちに思ひめぐらすと、短歌といふものについて、いろいろの暗示を與へられる。曙覽が連作にも詞書を附したのは、如何にも卓見であつたと言はざるを得ない。例へば、窪田氏の既に言はれたやうに、前掲の長遠の連作に於て、詞書の内容を連作中に取り入れることによつて、果してよりよき連作を作り得たであらうか、より完璧な有機體を期待し得たであらうか。甚だ覺束ないことである。

私は、ここで再び短かい連作と云ふものについて考へて見たい。曙覽の連作の多數が短かいものであるから、その感動内容が従つて貧弱であると思ふ人があつたら、それは藝術を解せざるの徒であらう。言ふ迄もなく、彼の連作の短かいのは、感動内容に關するのではなく、連作態度の上の問題である。即ち稀

疎の部分を取り、又は詞書にゆづつて、濃醇の部分を取らぬ、それが彼の表現上の手段に外ならないのである。

長遠の連作以外、詞書の添へてあるものは尠くない。それについては、前掲の表を一覧されたい。唯だ、ここで、一言附け加へておき度いのは、連作と連作とを繋ぐに、やはり詞書を以てした例のあることである。例へば表中(7)(8)(9)の三連作は、一回の羈旅の作であつて、(7)の前に詞書があり(8)と(9)との間にも詞書があり、(8)と(9)との間には、孤立した短歌や所謂集作があり、(9)の直ぐ前に又詞書がある。恰も一つの波状をなした曲線の山を連作で、谷を詞書であらしたやうなものである。後生長塚節は、やはり此の種の手法を連作に應用して成功した。彼の長篇の「針の如く」がそれである。私は竊かに思ふ。通常の旅などの作では、特に、かう云ふ行き方が賢明ではないかと。曙覽の連作にもやや形の長いものがある。例へば(38)の「人麿

の御像のまへに」十四首、(8)の「日のひかり」の八首、(36)の失題と、(41)の紙漉の各々七首とが、それである。そのうち「日のひかり」は、有名な採鑛冶金の歌で、同時に彼の連作の代表的のものの一つであるから、ここに引用して見やう。

日のひかりいたらぬ山の洞のうちに火ともし入てかね掘出す

赤裸の男子むれゐて鑛くわがねのまろがり碎く鎚うち揮て

さひづるや碓かろすたててきらきらとひかる塊つきて粉にする

箕かけとる谷水にうち浸しゆれば白露手にこぼれくる

黒けぶり群りたせ手もすまに吹鑛ふきかせばなだれ落るかね

鑛くわがねすれば灰とわかれてきはやかにかたまり残る白銀の玉

銀しろがねの玉をあまたに筥に收れ荷緒にがせかためて馬馳らす

しるがねの荷負る馬を牽たてて御貢つかふる御世のみさかえ

この一聯は、所謂事件の推移を、逐次的に叙したもので、記述に陥り易い境

であるにも係はず、作者のをどつた心はよく、それを、纏まつた一篇の詩としてゐる。この連作をよんで、氣のつくことは、一首々々の間隔の或は密に、或は疎になつてをることである。例へば、第一首は序歌であつて、密な關係に於て第二首に接續し、第二、第三、第四首の間には、可なりの間隔がある。第五と第六首との間には、再び密接な關係があり、第六と第七首との間には、再び可なりの間隔があり、第七と第八首との間は、密であつて、第八首は同時に締めくくりの役をつとめてゐる。即ち一首々々の排列間隔の稀疎と周密との巧妙なる按排によつて、全篇のだれるのを防止してゐると思はれる。之を長遠の一聯に比べたならば取扱はれた事件にもよることではあるが、長遠の連作の水も洩らさぬ底の、密なる相互關係のあるのに比し、どこか粗枝大葉と云つたところのあるのを見るやうである。ここにも作者の苦心の跡がよまれると思ふ。比較的長いものでは、この「日のひかり」をのぞいては、一首々々に、變化

を求めて、全篇の弛緩に備へた苦心は認められるが、大體として、優れたものはないやうである。されば大體論としては、略覽の連作は、短かいものの方によいものが多いと云へやう。

連作に於て取扱はれた材料について言ふと、人事を對象としたもの、又は述懐の作が大部分を占めてゐて、自然を對象としたものは、ごくごく少數である。唯だ彼の題畫の連作に於て、此の種のもものが散見するに過ぎない。此の傾向は一つは彼の環境の然らしめたものであつて、連作以外の作についても、略ぼ同じやうな割合になつてゐるから、自然を對象としたものを、殊に連作に適しないとしたとは思はれない。彼の題畫の行き方は、畫趣の餘韻を歌にすると云ふ態度よりは、寧ろ畫面にあらはれたところを寫生したものが多し。即ち彼の特色の一面たる、客觀描寫の方面を應用したものが多し。一例として萬竹圖四首を引くことにしやう。

ありと有る竹に風もつ谷の奥水の響をそへて鳴りくる

河隈のいはほに根はふ竹と竹なびきぞ回る水を狭めて

潤めぐり流るる水をはるばると靡きおくりてつづく竹かな

滑らかに露もつ苔路風ありて下陰くらき竹の奥かな

この第四首目の歌について、窪田氏は「前三首とは、気分がちがつてゐる。

前三首は晝を向うへ廻して、傍觀者として觀賞してゐる。この歌は、自身が晝中へ飛び込んで物を云つてゐる。この方法は、前の、長遠を吊つた時の連作と同じ行き方で、曙覽の方法とも癖とも云へるものである。長遠の連作の時は、それをいいと思つたが、こちらではそれ程に思はない。無くても、連作としての味ひは變つて來ない。必然性が乏しいと思はれるからである。むしろ私は、無いのがいいと云ふ氣がする。しかし、獨立した一首の歌とすると、前三首よりも此の歌の方がいいと思ふ」と言つてゐる（朝の光第四卷第七號）。即ち連作

としては完璧のものと云ひ難い點があり、藝術の匂ひも深いとは云ひ難い。此の他にも、題晝の作は少からずあるが、取り立てて云ふ程のものはない。概して云へば、曙覽の連作は人事を對象としたもの、又は述懐の作によいものが多く、その他には乏しいと言ひ得るであらう。

彼の連作について、藝術的價値の高いものを擧げるならば（2）父の十七年忌（3）幽居雪（5）しらみ（8）日のひかり（9）衣手の飛驒は（12）をりなふれて詠みつづけける（13）顯はさむ（14）品さだめいひこころみて（15）壁くぐる（16）撫やまぬ（17）つれづれなるままに（18）一部の文かきをへむ（20）ある時（29）さびしかりける日（30）ひとりごとの十五種であらう。

最後に曙覽の連作が自覺的のものであつたか、どうかについて一言して見た。古泉千樞氏は竹乃里歌全集の卷末小言に於て「歌の連作は先生（子規）によつて初めて自覺的に作られたのである。明治三十三年七月「日本」新聞に出

た先生の募集歌讀平家物語に就きてといふ文中「一題にて數首聯作を爲すに利あるべし」といふ言葉がある。これが「連作」といふ語の歌壇にあらはれた最初のものである」の言をなしてゐる。又橋田東聲氏は霸王樹（大正十二年七月初のもの）の竹の里歌私鈔（二）のうちに「さて歌の連作であるが、この作例は曙覽（一）の竹の里歌私鈔（二）のうちに「さて歌の連作であるが、この作例は曙覽（一）にもあるが、自覺的にこれを試みたのは子規である。元來この試みは俳句の一題十句から來たもので云々」と云つてゐる。然し、私には、何故に子規の連作が自覺的であつて、曙覽のがさうでないのか判らない。私自身に取つては、曙覽の連作が自覺的のものであつて、彼がそれをよく利用することを知つてゐたと云ふことは、彼の連作の量と質とについて、これまで述べ來つたことによつて、少しの疑ひもないことである。若し子規が自覺的に連作を試みた最初の人であると云ふ主張が「一題にて數首聯作を爲すに利あるべし」と云ふ彼の一言に基づくのならば、それは餘りに樂天に過ぐるであらう。

子規は嘗て、曙覽の歌について論じた（古泉千樞著竹里歌話又は續子規隨筆参照）。そして、前の「日のひかり」の連作全部を引用し「採鑛溶鑛より運搬に至る迄の光景仔細に寫し出して目観るが如し」と評してゐる。之は明治三十二年二・三月のことである。彼が「一題にて數首聯作を爲すに利あるべし」と唱へたのは、その翌明治三十三年七月のことである。古泉氏の卷末小言には、猶ほ次の一節がある「左千夫先生の説に依れば、明治三十三年の「五月二十一日雨中庭前の松を見て」十首の歌が眞の連作の始である。この時連作の精神と妙趣とを自覺せられたのである」と、子規の連作が、一題十句の俳句製作に胚胎してゐると云ふ説は、ほんたうにさうであらうと思はれる。然しながら謂ふところの連作の精神と妙趣とは、果して曙覽に負ふところがなかつたであらうか。

批評と鑑賞

## 景樹の歌一首

照る月の影のちり来る心地してよる行く袖にたまる雪かな

と云ふ景樹の歌の解釋について橄欖誌上で疑議が挟まれてゐる。まづ同誌二月號（大正十五年）の紫煙時議欄に同社の曠平氏がこの一首を雪の歌として解釋し、以前窪田空穂氏が月の歌とされたのに對して異議を唱へてゐる。私は空穂氏がされたと云ふ其の評釋をよんでゐないが、曠平氏の云つてゐるところによつて、其の片鱗を察することが出来る。即ち……然も月影を「雪かな」といつた位の誇張は短歌では許せる（空穂氏）の言と書添へてあつた。……とある。

即ち空穂氏は月光雪の如しと云ふ意味の歌と解し、雪を月光の隱喩と見てゐるのである。實は當時私は自分の興味から、多少の文献をも參考して、この歌に

ついでに考をまとめた。そしてそれを同誌上に發表させて貰はうと思つてゐた。然るに忙がしい日がつづいたために時宜を失してしまつた。

ところが、今著いた同誌六月號を見ると、淺野梨郷氏が同欄で再びこの歌に何とか解釋が附けたいと云ふ希望をのべ、古いアララギにのつてゐた「短歌研究」中に此の歌の合評のあるのを紹介し、他の文獻にも言及してゐる。それを讀んで以前自分だけの問題としてゐたことを發表する氣になつた。彼是してゐると又々書けなくなつてしまはう、直ぐ書いてしまはうと思ふ。

曠平氏がこの歌を月の歌ではなく雪の歌であらうと云つてゐるのは、桂園一枝を覗いて見なかつたからの誤りで、同書には明かに寒月と題してある。そしてその前後の歌も冬の月の歌であるから、作者が寒月を對象としてゐることは明かである。惟ふに同氏が雪の歌と思ひ込まれたのは……第二句心地してなどから見ても雪が主と思ふ……と同氏が云つてゐる點にあらうと思ふ。しかし、

心地しては散り來るだけに懸るのである。それを同氏は初句にもかかるやうに取られたための誤解だらうと思ふ。そして照る月の影の云々は當然眼前を云つてゐるのである。

淺野氏の引用してゐるアララギの合評を讀んでも、月を眼前にしてゐると云ふ點に於ては一致してゐる。之は寒月の詠であると云ふことを知れば誰しも氣の附くことで、曠平氏が心地して迄の全體を比喻であるやうに思つたのは、それを知らなかつたためであらうと思ふ。

ところがアララギの合評を讀むと、古泉氏始め何れも月前に雪のふつてゐる歌、即ち月前の雪と云ふ題を附すべき歌と解釋して種々の批難を試みてゐる。例へば古泉氏は

寒の月が冴えた夜、道を歩いて居るとちらちらと雪が降つてくる、自分は何とも云へぬ身にしみとほるやうな好い氣持だ……今此歌では雪を月の光に比べて恰も月の光が散つて來



るやうに思はれるといふのであるがあまりことわりすぎて居ると思ふ云々

と云つてゐる。かう云ふ解釋は今日の歌壇常識を以てすれば一應は首肯し得ぬではない。實は私も卒讀した際には、さう云ふ意味にうけ入れた一人であつた。しかし、私は間もなくその解釋を棄てた。なぜかと云へば古人の歌殊に古今以後の影響を受けた歌は、今日の歌壇常識では、面白さは勿論、その意味さへも正解し得ぬ場合が少くないことを知つてゐたからである。私は古人の歌を解するには古典や傳統や、今とは異なつた作歌態度などの上に十分の注意を拂ふべきだと思つてゐたからである。そしてその趣旨から、今一應寒月と云ふ題に留意した。

之は周知のことであるが、古今以後の歌集、わけても古今集では、題なり詞書なりの意味と歌の内容との間に、水も漏らさない周到な用意が拂はれてゐるこの點においては、今の吾々は甚だ遣りつ放しである。之は實感を基礎として

作歌するのと、空想（題詠）を主としてよんでゐるとの態度上の問題が根本に横はつてゐると思ふ。古今以後の題詠を主とした時代に於て、題と作との間に周到な注意が拂はれたのは當然の歸結だと云へる。景樹のこの歌が題詠であるか否かは不明であるが、彼は實作家としては古今集の範疇を出で得なかつた人である。そして頭腦の明晰なことでは申分の無かつた人である。その歌の佳否は別問題として寒月なる題の下に、月下の雪の意味の歌は詠まなかつたらうと思はれる。私のこの想像は桂園一枝を繙いた人には異議がなからうと思ふ。

斯く題意に重きを措いて來ると、一首の重心が寒月の上になくはならないさうすると勢ひ窪田氏の解したやうに、雪を月光の隱喩とし、一首を月光雪の如しの意味に解せざるを得ない。

さて月光雪の如しと云ふ思想は景樹によつて創始されたものであつても、古來行はれてゐたものであつても、一首の藝術上の價值には大した關係はない。

しかし、作者によつて創始されたものだとすると、結句の据え方は可なり大膽だと云へる。かうした見地から、私は一應傳統を調べて見たいと思つた。そして萬葉には無かつたと云ふ記憶を信じて、うろ覚えの八代集の秋と冬の部を一通り眼を通した。そして淺野氏と同じやうな結論に到達した。即ちこの思想は平安京以來のもので、而も當時の流行のもの（概念化された）であることを知つた。例歌はやはり淺野氏の引いたものが適切である。即ち後選和歌集の

衣手は寒くもあらねど月影をたまたぬ秋の雪とこそ見れ（秋の部。月の歌の條下にあ

貫之

り）

うば玉の夜のみふれる白雪はてる月影のつもるなりけり（冬の部。題しらす）

よみ人しらす

の二首は動かぬ明證を示してゐる。月光と雪との關係について云ふと、何れも雪が月光の比喻物とされてゐる。即ち景樹の歌と同じい。そして卒然として讀

むと、大膽と思はれる景樹のたまる雪かなは實は貫之のたまたぬ秋の雪とこそ見れから來てをるのであつて、貫之の作から影響されてゐることは云ふ迄もない。否、貫之の歌を踏まへて、それに新味を加へ、且つその上に一步踏み出さうとしてゐるのである。少くとも比喻に於て本歌を抜かうとしたのである。

私は更に月光雪の如しと云ふ思想がどうして生れたかを知りたいと思つた。或は漢文學より輸入されたものであるかも知れない。と思つた。しかし、兎に角今日の東京在住者なる吾々には實感となりがたい憾みがある、むしろ一種の誇張として響いてくる。しかし、冬の外氣の溫度の遙に低い、従つて月光が一層冴えさつてゐやうと思はれる平安京に於ては、或は實感に近いものであつたのではあるまいか（景樹も洛東岡崎村に居を構へて居た）更に今一つかうした思想と關係を持つてゐたらうと思はれるのは、平安朝の人々が四季の自然の色彩に則つて、その服装や調度の色合ひを變化せしめたと云はれてゐることだ、

冬は主として白栲しろたけの衣を着てゐたらうと云ふ想像がゆるされやうと思ふ。前に掲げた貫之の歌の單に袖と云つてゐるのは、白栲の袖と見なくては一首が生きて來ない。

月光は冴えきつてゐる。そして人は白栲の袖にその月光をうけてゐる。さうしたシーンを想像すると、月光雪の如しと云ふ思想は遽かに生氣を賦與されてくるのを感じる。

勿論私は平安朝人ならざる景樹が白栲の袖に月光をうけて、この歌をよんだらうとは主張しない。しかし、貫之の歌から影響を受けた作として、この歌の袖といふのも、やはり白栲しろたけの袖を意味してゐやうと思ふ。そして歌を詠む者も鑑賞する者も共に狭い範圍に限られ、その狭い範圍内に於ては、傳統に通曉してゐた當時に於ては、かうした場合に袖を白栲しろたけの袖と理解するほどのことは、云はば常識に屬することであつたらうと思ふ。恐らく今日の如く文珠の智慧を

要しなかつたことであらう。

猶ほ心附いたことを一言言ひ添へれば、この歌の新味（本歌（？）に對して）は、ちる心地してと云つてゐるところにあらう。そしてちると云ふ雪の縁語を二の句に出して結句の雪にそなへ、四の句道ゆく袖と云ふ經過を示す語を用ゐて五の句たまるの突唐にならぬやうな用意を示してゐる。總じてこの一首は、技巧の上から云ふと古今よりも新古今に近いところがあつて、さう云ふ點からは優れてゐると云へる。巧緻で、ひどく頭を働かせてゐる。（大正一五・六）

## 良經の歌一首

水上やたえだえこほる岩間より清瀧川にのこる白波

新古今集冬の部にのつてゐる作で、一首の意味は尾上柴舟氏の云つてゐられ

るのが肯綮に當つてゐると思ふ。(同氏著古今と新古今三五三頁) 即ち

清瀧川の水上は、絶えなく氷つたものと見える。岩間には水が通つて白波が立つてゐる  
水上がすつかり氷つたならば、何の波も見えないであらうのに、と云ふのであらう。

と云ふので、初句のやを疑ひのやと解し初二を想像とし、三句以下を眼前の  
描寫としてゐるのである。

しかるに此の歌には古來種々な解釋が盛られてゐて難解な一首とされてゐる  
そしてその晦澁とされてゐる點は、三句の「岩間よりの」よりと云ふ詞の用法  
が普通の場合と異なるからである。言換へると此のよりが何う係つて行くかが  
明らかでないためである。

まづ、よりを結句の残るに係ると解したのは本居宣長である(美濃の家苞)。そ  
してそのつづきの正しくない事を指摘してゐる。

……岩間より残るといへる、詞ととはず、よりの下に、流れきてなどいふことなくは

足らざるなり云々

この解で知られるやうに、宣長は岩間を眼前のものとしてせず、上流にあるもの  
としてゐる。流れ來てなど云ふ事なくては……と云つてゐるのがその證である

宣長がかう理解したのは、初句のやを解きわづらつたからである。曰く

初句や文字わろし、此やはのといふ意と聞えたり、若し疑ひのやならば、二の句にて切る  
る也。

即ち彼はやをのの意味に解したかつた。そして二句切れの疑ひをもちつつ、句  
切れのない一首として解釋を試みてゐる。その結果何處までを上流の描寫と解  
してよいかに苦しみ、つひに一首を解きおぼせずにはつてゐる。

石原正明は、やをのの意味に解するのを不條理とし、飽迄疑ひのやであると  
云つてゐる。且つ二句切れの歌で二三の句を打返しだと云つてゐる。即ち……  
水上や岩間よりたえだえ氷る……と云ふ句のつづきとなるので、さうすればよ

りは當然二の句の氷るに係ることとなる。そして一首を次の如く解してゐる。

(尾張の家苞)

清瀧川の、なべては氷りもやらで、猶ほ白波の立つを見て、水上もかくの如く岩間より絶えぐ氷りやしつらんと也。

此の正明の説全部を繼承してゐるのが、鹽井正男である。(新古今和歌集詳解)

もし正明の如く一首を解釋すれば、云ふ迄もなく、岩間は上流にあることとなる。

以下少しく宣長と正明との解釋に批評を加へ且つ私解を述べる。

一、此の歌が二句切れであること、従つてやが疑ひのやであることは云ふ迄もあるまい。宣長がそれに氣づきながら上述の如き誤りに陥つたのは、例のよ<sup>り</sup>を文法的に、常識的にのみ解かうとしたからである。

一、私解では、此のよりは意味の上からはにと云ふ可きところであるが、さうすると四句の「清瀧川に」のにと差し合ふことになるのみならず、其の情景が歌としては靜的な、寧ろ死んだものとなる。作者の意圖は恐らく、その情景を動的に、且つ瞬間的に描きたかつたのであらう。従つてよ<sup>り</sup>と言ひ切つたのであらう。新古今時代は飽迄氣分を尙んだ時代である。そして表現の上では無理を遂げやうとした時代である。私の解釋は恐らく誤つてゐまいと思ふ。

一、正明の説は語法上どうかと思はれる。且つ下の句だけを眼前としたのは完全な描寫とは云へない。そして上の句全體を想像とすると、眼前より遙かに細叙されてゐる事になる。之は普通の行き方ではない。且つ……水上も斯の如く岩間より絶えぐ氷りやしつらん……と云ふ想像も無理と思はれる。

## 故新井洗君の歌集「微明」を読み返して

心の花の石村さんから、同誌の新井洗君追悼號（大正十四年十二月號）に同君のために何か書くやうにとの事であつた。私もそのつもりであつたのであるが、微恙のため果さなかつた。今かうして同君のために筆を執る日が來たのを嬉しく思ふのである。

新井洗君の名は今や殆んど歌壇から忘れられんとしてゐる。同君がささやかな歌集「微明」を歌壇に寄與したのは大正五年十月である。當時同君は恐らく三十歳前後であつたらうと思ふ。それから數へて約十年の間同君は殆んど歌作を示さなかつた。之が同君の名の忘れられんとしてゐる重なる原因である。私は同君をよくは識らなかつたが、同君の呼吸器病に關して多少の交渉があつた。そして數年前同君の微明を一讀したことがある。今回同君が亡くなられたにつ

いて、書架の塵にまみれてゐた同書を取り出し、讀み返して見る氣になつた。微明は僅々百二十頁の小歌集で、而も一頁に一首又は二首の歌が印刷してあるに過ぎない。されば歌としては二百首内外に過ぎないであらう。而も作物そのものの與へる印象は可なり深いものである。

微明の歌は青春の夢を追ふ歌が大部分を占めてゐる。そして卷末の作を見る

と  
我が妻の手づくね髪しつたなくも打亂るるを見つつ黙すも

と云ふやうな幻滅境を歌つたのがある。同君が微明上梓以後殆んど作歌しなかつたのには、いろいろの理由があらう。

花瓶の白菊かをる夜の寒さ肝油にしみし膚にかなしも

衄血はなぢが出たるばかりに灯の前に心しほたれ眠らむと思ふ

と云ふ様な作をよむと、身も心も共に弱かつた人だらうと察しられる。しか

し、それが必ずしも作歌を廢せしめた動機ではなかつたであらう。兎に角事實として、同君の作歌は幻滅期に入ると共に蹉躓を來したのである。

いつたい一人の作家の歌を、その著作年次を追つて見てゆくと、そこに明かに二つの時期が劃されてゐるのを見るであらう。第一期は今云つた青春の夢を追ふ時期で、幻滅期が來ると共にをはりを告げる。第二期は現實を直視して、その底に再び詩を見出すのである。古來の名ある作家は多くは第二期に於て佳い作を遺してゐるが、稀には第一期に於て佳いものを見せ、第二期には凋落してしまつた人もある。例へば家持の如きはその一人であらう。そしてさうした作家は、一種の藝の完成を青春期に於て既にもつてゐたやうである。新井君が果してさうした種類の歌人であるかどうかは容易に斷じがたいが、同君の藝にも一種の完成があつたと見られないこともない。さうすると、同君の死は人情としては悲しむべきであるが、藝と云ふ立場から見ると、その使命を果したも

のだとも云へると思ふ。

新井君の歌をよむと、同君は本質的に著明な感傷家であつたらしい。そしてその年齢と當時の歌壇の空氣との影響もあつて、浪漫的の色彩が可なり濃厚である。しかし、詩人としての天恵は可なり豊かな人で、若し單に青春を歌つた詩人としてのみ見れば、同君は明治大正を通じて稀に見る異材であらう。青春の詩人として氏が描き出した夢は、必ずしも大きいものではなく、深いものとも云へないかも知れない。しかし何人もがもち得るものでもない。ある異色ある個性が儼然として存してゐる。そして青春期の歌にありがちの厭味なところや氣障なところの毫も認められないのは嬉しい。

きらきらと今朝のあさ風落葉松の葉をまき散らす雨後のあかるさ

湖尻のせばまりはてて江なせる水滑らかに月にあをめり

浮洲のなか水の道せばくほの暗く月はまこもの根にきらめけり

あこがれの心で捉へてはゐるが、詩情は飽まで豊かで微細感をもつてゐる。

から梅雨の風吹きわたり大河の波の騒立ち閃けるかも

夕映えのひかりうち亂れ潮疾し船子がおらびのいらだたしかも

到るところ夢がある。そして若い人のもつ遣るせない氣分がをどつてゐる。何を歌つても作者その人が其處にゐる。

行きゆけど行き果さざる道なれかよもぎ枯れつつ續きてありけり

降り足らぬ今朝の雪ぞら凍みまさり出帆の銅鑼とどろこたます

これらの夢には美しさの底にわびしさと寂びしさとがある。戀愛を歌つたものには近代人らしい複雑さと煩悶とがあり、なまめかしく、物狂ほしいものがある。蓋し一卷の白眉であらう。

をさならが窓のそとも騒ぎにも君とあるころ亂れ苦しき

人間のいのちの奥のはづかしさ滲み來るかもよ君に對へば(性慾らしいものが美化さ

れてゐる)

足り足らぬ何やらを追ふこの夜らの君とあるころ時なさまたげ

君に逢ひて今歸りつつ行方なくしかも惑へるこの愁はも

秋の夜のともし灯ふけて物のくまほの黯ければ君が髮思ふ

死にかへりひびきを絶えしうしほ波うねりにうねりまなかひにあり

このままに氣ちがひにならばいかならむ人を見わけて口走りせむ

菊の花灯かげに白く夜を寒み君が素足のいとほしきかな

だありやの霜にくづるる朝寒に心わなくなつかしなつかし(この歌後の利玄氏を思

はせる)

寒き夜をひとりさびしく思ひふけ立てば帯さへほどけぬるかな

新井君の歌は、觀照を旨とする現歌壇の人々からは當然喜ばれ得ないものであるが、之等の戀歌にはさうした潮流の變化によつてその藝術價値を左右されない深い生命に根ざしたあるものがある。それを何人も否定し得ないであらう



猶ほこの歌集には都會人の情趣殊に江戸つ子氣質が滲み出してゐる。兎角都會人の歌は上つ調子な輕浮なものになり易いが、さうした形跡のないのみならず、一味の上品さのあるのは作者の人柄が偲ばれる。いつたい明治大正の歌壇には田舎者が巾を利かしてゐて、一人の優秀な都會人のよみても見當らないやうである。この點に於て新井君は殆んど唯一の都會人の代辯者であらう。上に引用した作にも都會人の心を心としたものがあるが、この種のものに猶ほ

新しき船のさし板檜いた朝日にてらふ波のただなか

小さな地震ゆり景色との曇り我が氣不精の蟲がかぶれる

理髮師は朝戸あけつつ白百合の鉢持て出でぬ街の露けさ

もしこの歌集を表現と云ふ方面から見ると、作者が如何に骨を削るやうな苦心をしたかがありありとよまれる。心もちに隨順した表現がそれに適はしいリズムを一首々に與へてゐる。中には餘りにこりすぎてやや晦澁に陥つた

のもあるが、之は心もちそのものが面倒なためであらう。(大正一四・一一)

## 梅の歌二首

空の色瑠璃に和めり白梅の咲き満てる梢の枝間々々に

利 玄

晴れわたるあを空に向き梅の花しろくひらけりひとつひとつに

空 穂

木下さんの李青集のうちに「私の冬の歌」と題して、數首の歌を自釋されたのがある。それを面白くよんだ。そしてふと其處に引かれてある梅の歌と同一境地のものが窪田さんのにもあつたのを思出した。それは昨年の短歌雑誌の現代歌人自選歌號にのつてゐたものであつた。私は兩氏の歌をよみ較べて見た。

そしていろいろの事を考へさせられた。それを卒直に述べて見たいと思ふ。その二首は云ふ迄もなく上掲のものである。

前以てお断りしておきますが、この二首は二氏の代表的のものとは云ひ難いかも知れません。しかし、それぞれの中軸以下のものでもありますまい。實を云ふと、私は優劣を批判する意味でこの二首を相撲はすのではありません。従つてこの點は深く顧慮するに及ばないと思ひます。前にもちよつと觸れたやうに、この二首の取扱つてゐる境地は殆んど同じだと云つてよい。即ち何れも咲きつた梅の花のもとに佇つて青空を見上げてゐるのです。然し二首の與へる感銘は全く異つたものです。それは主として二氏の作歌態度の相違に歸すべきだらうと思ふ。そしてこの二首には二氏のさうした方面の相違が可なり著明に出てゐる。その點で私はこの二首を問題にして見やうと思ふのである。

それに先立つて、この二首に共通な點を擧げませう。それは氣品に富んでゐ

ると云ふことです。之は態度問題を超越したもので、二氏の作のすべてを貫いてゐる本質的のものと思ひます。猶ほ之は二首の與へる感銘の相違の上の問題になります。窪田さんのは老いた歌で、冷めたく、冴えきつて、素朴で、あのきびしい冬空を偲ばせます。木下さんのは全く違つた感じで、稚く、瑞々しく、潤ひと匂ひとを持つた初春の空です。之は二氏の年齢の相違にも由ることですが、やはり二氏の本質に根を卸してゐる問題で、作歌態度以上のものと思ひます。

さきに境地は同じだと云ひましたが、二氏の眼のつけ場はちのづから違つてゐます。窪田さんのは梅花を主とし、木下さんのは青空に眼をつけてゐます。しかし、感銘の相違はこの點よりもより多く作歌態度の上にあると思ひます。便宜上まづ窪田さんのから述べて見ませう。

まづ木下さんのが何處か由緒ある梅林でも徘徊してよんだと云ふ感じを與へ

るのに對して窪田さんののは、ほんのそこいらの道を歩いてゐてよんだと云ふ感じ  
じです。木下さんのを極彩色の繪——氣品のあるところから、光琳の繪だとし  
ますと、窪田さんのは名流の墨繪を偲ばせます。

私はまづ窪田さんの歌の省筆法に注意したいと思ふ。梅の歌であるのに、氏  
はその花のみを云つてゐて、その特色ある幹と枝については一言も觸れてゐ  
ません。しかし注意すべきことは、花そのものを單にそのあるまゝに肯入れて  
はゐないことです。作者は「あを空に向き梅の花白くひらけり」と云つてゐま  
す。其處に作者の主觀が強く動いてゐます。あを空のもとにと云はずして……  
に向きと云つてゐるのがそれです。白く咲いたと云はずして……開けりと云つ  
てゐるのがそれです。作者は蒼空と映發してゐる花を見てゐるのです。單に梅  
花そのもののみを見てゐるのではありません。梅花の白が蒼空の青と相對峙し  
而も相親しんで、それだけで一つの纏まつた世界を作つてゐる。其處に作者は

感を發したので其處に詩の世界がある。そして結句に於て「一つ一つに」と云  
ひ据ゑてゐる。この發想は容易でないと思ふ。白梅とそれに劃くわられた蒼空とよ  
り成る世界がいくつか集まつて又一つの世界を作つてゐるのです。之が作者の  
感じたものであり、云はうとしてゐる凡てです。作者はそれだけを調べを重ん  
じて確つかりと云ひ据ゑて居ます。即ち飽まで自分の感に惹付けて物を云つて  
ゐます。輕卒な讀者には單なる寫實の作のやうに思はれるかも知れませんが、  
實は作者の假象の世界です。

勿論作者はあの特色ある梅の幹やその枝から、又それらとその背景をなして  
ゐるものとの關係から、いろいろな感銘を受けたであらう。然しながら作者は  
少しもそれに觸れやうとしてゐない。作者は最も強く自分の眼を惹付けた一點  
のみを明晰に力強く云ひ据ゑて、それで足りるとしてゐる。そのものの周圍或  
ひは背景又は背景となつてゐる氣分は、自然その歌の中へ滲みこんでくると信

じてゐるのであらう。しかし、この歌のみについて云へば、蒼空の下にその青さと映發して漂つてゐる梅花だけで十分である。その他のものは寧ろ私にはあらずもがなである。寧ろ汚點となると思はれる。それほどに纏まつた一つの世界が描かれてゐると思ふ。

然らば作者の心を最も強く惹付けた、云はば焦點とも云ふべきものをどう理解すべきであるかと云ふと、それは云ふまでもなく作者の第一印象として受入れたものである。いつたい或る事象に對する場合、印象は一にして止まない。第二第三の印象があり、更により多くの印象が生ずる。然しながら第一印象が最も力強いものである。其處には分裂しない全精神力が發生期のつよさを以て活動してゐるからである。窪田さんのはその第一印象のみを取扱つてゐる。そこから一步も踏み出さないとしてゐるのみならず、實物實景をも眼前から拂拭し去つてゐる。そして氏の眼前には假象の世界のみが展開されてゐる。氏の捉

へむとしてゐるのは正しくそれだと思はれる。

木下さんの興へる感味は之とは全く別趣のものである。私には何となく新古今の

なごの海の霞の間よりながむれば入目をあらふおきつ白浪

が聯想されます。勿論事象は似ても附かぬものですが、その手法に一味共通の點があるからでせう。まづ大ざつばに云つて繪畫的なところが似てゐます。殊に事象の全局を捉へて來て、其處に漂渺たる、甘美な情趣とを狙つた態度が似てゐるのです。勿論私としては、新古今の才と頭とでまとめてゐるのよりは、何處にか一味の稚拙さがあり、童心が快よくながれてゐる木下さんの方に心を惹かれますが氏はこの歌を次のやうに自釋してゐます。

大地を蔽ふ無窮の久方の蒼空が、ここでは白梅の花のいつばい咲いた、枝間々々に劃られて、小さく麗はしく、やさしく見える。梅花と空とは、ついてゐて離れず、離れてゐてつ

かず、所謂不即不離の關係にあつて、互のよろしさを助け合ひ渾然たる境を作り出してゐる。梅樹の下から、一月の空を仰ぐのは、私の喜びの一つである。

若し氏のあの歌をよまずに、單にこの文章のみを讀めば、詩趣よりも寧ろ畫趣が油然として眼前に展開されるであらう。ここには少くとも二つの焦點がある枝間々々に劃られて、小さく麗はしく、やさしく見える蒼空はその一つである不即不離の關係にある梅花と空とはその一つである。感動のおこつた順序から云ふと、作者はまづ蒼空を見てゐる「空の色瑠璃に和めり」とまづ主要な感動を初二の句で云ひ据ゑてゐるではありませんか。それが謂ふところの第一印象です。しかし、氏はそれだけを云つて一首にまとめやうとはしてゐない。第二第三の印象をも第二の焦點として一首のうちに取入れてゐます。之は氏がひたすらに情趣を追ふ心の發露です。氏が謂ふところの「渾然たる境」即ち事象全體が醸してゐる氣分を捉へんとしてゐるからです。ここに大きな相違を二氏の

態度の上に見出します。前にも云つたやうに、窪田さんは第一印象のみで足りるとし、其處に自分の顔を判つきりと出してゐます。即ち木下さんの謂ふところの「梅花と空とは、ついてゐて離れず、離れてゐてつかず、所謂不即不離の關係にあつて互のよろしさを助け合ひ云々」と云つてゐるところだけで足りるとし、そこを強調して云つてゐます。従つて此の情景だけについて云へば、窪田さんでは印象鮮明に出てゐますが、木下さんでは讀者の想像力を要します。作者が全局の上に眼を著けてゐるからです。かうした態度上の相違は當然の結果として、窪田さんのを單純な、縦の趣のまさつたものとし、木下さんのを複雑な、横の趣に富んだものにしてゐます。とは云ふものの木下さんのに縦の趣がないと云ふものではありません。統一されてゐないと云ふものではありません。然し、畫趣を重んじた歌が横の趣に於てまさるのは云ふまでもないことでせう。唯だ木下さんののは、この人のもつ驚異感が餘程までに縦の趣を作り、従

つてある程度までに統一を保たしめてゐます。そこはさすがにこの人だと思ひます。

若し事象と云ふ方面からのみ見ると、窪田さんのはややあつけないと云ふ感じを起す人があるかも知れません。之に反して木下さんのは繪卷物を見るやうな面白さがあります。それも極めて上品な繪卷物です。しかし、作者自身が作の上はどう現はれてゐるか云ふ點から見ると、窪田さんのは事象そのものが同時に作者の顔だと云へます。即ちその關係が全く直接なものになつてゐます。之に反して木下さんの中では事象のうちに作者の顔が反射されてゐます。即ちその關係が間接的なものになつてゐます。この關係から云ふと、窪田さんのは抒情詩を詠む態度であり、木下さんのは繪畫又は散文をものする態度だと云へると思ひます。

勿論二氏の歌の凡てがさうした傾向だと云ふのではありません。しかし大體

に於てややかうした傾向が看取されると思ひます。(昭和五・一)

## 利玄の歌に見る童心

木下氏の歌の本質として、氣品を備へてゐると云ふことを前號に述べた。本號では更に他の一つの本質として、氏の童心について考察して見たいと思ふ。それには同氏の「李青集」中の「曼珠沙華の歌」の一聯を見るのが最も便宜である。この歌は晩年の作で、同書の卷末に「集中曼珠沙華の歌の如き故人の殊に愛した作である」と編輯者の石樽茂君が記してゐる。私としても氏の諸作中最も愛誦した一篇である。まづその一聯の作を紹介することとする。

わが故郷にては曼珠沙華を狐ばなと呼ぶ。われ幼き頃は曼珠沙華の名は知らざりき。

(1) 春ける彼岸秋陽に狐ばな赤々そまれりここはどこのみち

- (2) 曼珠沙華眞赤まじかに咲き立つほそ徑を通りふりむけばそのまま又見ゆ
- (3) 曼珠沙華毒々しき赤の萬燈を草葉の陰よりささげてゐるも
- (4) 曼珠沙華叢の中ゆ千も萬も咲き彼岸佛の供養をするか
- (5) 曼珠沙華あやしき赤の藥玉くすりたまの目もあやに炎ゆ草生のまどはし
- (6) 曼珠沙華咲く野の日暮れは何かなしに狐が出るとおもふ大人おとなの今も
- (7) 町を近みくたびれ歩むみちばたにさいなみ捨てある曼珠沙華の華
- (1)は廣い野原に一筋通つてゐる細い徑と、そこに赤々と夕日に染つてゐる狐花とが目に見えてくる。そして人通りが絶えてゐて、人柄の好ささうな子供がただ一人その徑をとほつてゐるのを感じる。華やかで寂しく、秋の夕日そのものから受ける感じである。一種幻怪な境とも云へるが、豊かな童心につつまれてゐて、溫籍な味ひをもつてゐる。春ける 彼岸秋陽 狐花等暗示に富んだ語がよく効果を擧げてゐる。結句は一首の漂渺とした夢の感じを與へてゐるが、この種の据りにくい發想が不思議にもよく据つてゐるのは、作者が童心に住し

得たためであると思ふ。

(2)は(1)を承けて舞臺がずつと小さくなつてゐる。曼珠沙華と作者とのみで一首を構成してゐる。下の句のやうな特殊な發想が生きてゐる點に、この作者の特徴がある。やはり技巧の問題ではなく、心の問題であると思ふ。そのまま又見ゆと云ふ結句には童心に根ざした憧憬がある。それが一首を生かしてゐるのである。

(3)は心を惹かれる作である。物の怪もののけの世界であるが鬼氣人をおそふと云ふやうなものではない。草葉の陰から赤い萬燈が顔を出してゐるお伽の國の物の怪である。美しく、毒々しく、そして儚ない曼珠沙華の花がよく象徴されてゐると思ふ。

(4)はやや大人の心になりかけてゐるが、千も萬も咲きと云ふ誇張が目立たないところ、やはり作者の豊かな驚異の心を思はせられる。

(5)は(3)と似た境地であるが、この作者の貴族的な氣品と、わざとらしくないたちのよい夢とを見る。其處にやはり童心を認める。

(6)は大人を點出してはゐるが、その大人も現實の上に大きな眼を睜つてゐるのではなく、やはり伽の國の大人である。一聯の夢の名残がここにある。

(7)に至つて作者は現實に一步を踏み入れてゐる。一聯全體の効果から云ふとこの一首は寧ろ省略すべきではなかつたらうかと思ふ。

この一聯の面白さは、事實の凝視をつづけて來た作者が、ふいとその眼を事象から離れたところにあると思ふ。氏の以前の作には、事象の凝視から來る即き過ぎたところと、こちたさどが可なり目立つてゐた。然るにこの一聯にはそれが無い。勿論その微細な觀察は氏の日頃の心掛けの賜物であるが、作歌時に於ては事象そのものには執してゐない。嘗て享受した印象だけで物を云つてゐる。空想で詠まれた歌（この歌はさうではないが）に見るやうな豊かさとおほ

らかさがあるのはそのためであらうと思ふ。私はこの作が事象に即き過ぎた態度から脱し得た點に於て、作者の達し得た最高峯であると思ふ。

この一聯は幼時の追憶が主になつてゐる。兎もすれば灰色になりがちのさうしたものを、かくまで生彩を帯びて再現し得たところに、趣味豊かに生立つた作者と詩人としての天分をもつた作者とを思はざるを得ない。その詩人としての天分の重なるものはと云はば、私は前にも云つたやうに、氣品と童心とであると思ふ。氏の藝術は云はれてゐるやうに玉石混淆である。然しながらその失敗の作からも嫌な印象を受けないのは、この二つの特徴が本質的に存してゐるからだと思ふ、そしてその本質が無碍に發揮されてゐるのがこの一聯である。

最後に私は氏の童心について一言したいと思ふ。氏の藝に見る童心は、良寛の歌又は梁塵秘抄のあるものに見る童心とは全く趣を異にしてゐる。是等のものに現はれてゐる童心は老いさびた心と抱擁してゐる。従つて木下氏のものに



比し、もつと寂びた、もつと大きな世界を背後にもつてゐる。心境と云ふ上より云へば木下氏のものよりは遙に優れてゐる。若し過去の藝術について氏の童心に最もちかいものを求むるならば、萬葉のよみ人知らずの歌を擧げざるを得ないであらう。然し同時に氣品をも備へてゐると云ふ點から云へば、中皇女命のわが背子は假麻カマつくらす萱カなくば小松が下の草を刈らさねであらう。木下氏には現代人らしい物の見方があるが、醇の醇なる童心、生まのまままで傷つけられない童心を持ちつづけてゐると云ふ點に於ては揆を一にしてゐると云へる。そしてその何れもが貴族であつたことにも注意される。

(大正一五・三)

### 小田觀螢氏の作を評す

圏外から圏内を覗く場合、兎角誤解が有りがちであらう。しかし、又廬山の全容を知り得ることがないでもない。但し私の此の粗笨なる一文は、習慣風俗を異にする外人の日本觀光記の類に過ぎない。大きな過誤を冒すことがなければ幸せである。

○  
この歌集を讀んで私の先づ第一に印象されたのは、一つの心境から他のより高さ心境への轉換期に於る所産であるといふことである。随つて全巻を通じて劇しい動搖があり、苦悶があり、推移がある。それにも係らず、私は氏の藝の本質を臆ろげ乍ら掴み得たやうに思ふ。その一つは所謂太みである。そして他の一つは歌の姿の大きいといふことである。

○  
好評を博した氏の前歌集「隠り沼」は一讀の機會を得なかつたが、「忍冬」

の跋文中にその數首が引かれてある。

見てゐれば月は落ち行きはたけ道枯れ立つ草に風ふく暗く

當時の作に對して氏は甚しき不満を寄せてゐる。之は氏の其後の作歌態度から見て毫も怪しむに足りない。然し、私には必ずしも「單なる形骸の叙述」とのみは言へないと思ふ。現實に即し過ぎてゐるといふ譏りはあるかも知れぬが、氏の本質と直觀の閃めきとは認めざるを得ない。

○

然し、氏は當時の作は嫌らぬものとし、「一そう深く高く高い世界に逍遙しその自然の風物に自分の心を倚托させて、其處に自分の姿を見出さうとする傾向を追求するに至つた」と云つてゐる。氏の此言は私の言葉を以て言へば、造化の懷に入り、其處から自分の本然の姿を見るといふことであらう。云ひ換へると個を擺脫して全に到達し、其の立場から個を見直すといふ事であらう。之

は當然個を通じて全に至るといふ態度ではない。私は今、この根本問題について論議することを避ける。然し、此歌集のもつた問題の大部分は作者の此の態度に繋つてゐると云つてゐる。

○

秋更けて碧しるしと見る空の西日となりていや澄みにけり

蜀黍の實莖にしみに乾枯らびてころをとむる秋となりたり

此の二首は「忍冬」巻頭のものである。氏はこの二首に對して「現實的自然の上に立ちながら、中道的空觀に依從して行かうとする傾向をあらはして來て、靜寂其の物の中に聲息を通はせ、鼓動を等しうしやうとする心持も受容されてゐるのである」と云つてゐる。然し、圏外の者より見れば觀念に於て五十歩を進め感受と直觀とに於て五十歩を退いたものと言はざるを得ない。

○

明けしらむ雪野の空に月一つうつつの夢をさながらにする

氏の言つてゐるやうに「忍冬」初期に於る人事方面の代表作である。この歌について「従來の現象的色調や現實的色相も幾分稀薄なものとなり云々」といふ氏の言は氏の祈願をよく語つてゐる。しかし、詩歌から現實刺戟の一切を排除し、之を昇華上天せしむる事は果して何うであらうか。

○ 「忍冬」の表現技巧は大體に於て新古今風である。氏の作歌態度から其處へ赴くのは自然の趨歸である。周知の如く、新古今には古今から傳統をひいた主情的なものと、客觀的描寫的のものがある。前に引いた人事の歌は前者であるが、後者に屬するものも一半を占めてゐる。そして新古今に於て既に然うであつたやうに、此集に於ても後者の或るものは連俳の形式へ脈を引いてゐる。

呼子鳥ことしも春を來て鳴くや四つになりたる下駄の足どり

之は後期に屬する昭和二年の作であるが、之等にも連俳の影響があると思ふ氏はこの作について「中に貫かれた感合の味ひを現はさうとする試み」をしたと言つて居られるが、氏も既に自覺して居られる様に、斯ういふ感合の藝術は懸崖の上を歩むに似てゐる。そしてともすれば趣致に赴き易い。

○ 氏には物から離れて行かうとする傾向があると共に、一面には物に執し、極めて克明な處もある。そして此二つの傾向が相尅してゐるやうに思ふ。斯くしてその一首一首は深く根を張つてゐる。爲めに圈外の者には卒讀したのでは感となつて來難いものすらある。甚だむづかしい。しかし、之は一面には氏が一首一首に餘りにも多く心持を持たせやうとしたからではあるまいか。もつと截斷すべきではあるまいか。

○  
氏の歌の感味には暗い處がある。實際卷を蔽ふまで一つの微笑にも接するこ  
とができなかつた。この暗さは、一つは奥蝦夷といふ氏の環境並びに孤獨なる  
氏の家庭的環境の影響であらう。しかし、一面には又氏の本質とも見られると  
思ふ。只だ氏の歌の暗さには如何にもじめじめとした處がある。若し氏が觀念  
的に到達し得た深さが心境的のものとなり了する日には、必ずやその暗さはも  
つと冴えたものとならうと思ふ。

○  
力量といふ點から云へば、私は「忍冬」の作者に敬意を表せざるを得ない。  
そして心境を高めやうとする作者の一途の祈願にも敬意を惜しまない。しかし  
修道士らしき忍苦の道を辿つてきた作者は、再び元の無分別の境に歸るべきで  
はあるまいか。卷末の「白糠」一聯には既にその轉向を認めることが出来る。

私はこの歌集から教へらるる處多かつたのを謝し作者の向後の作に大きな期待  
を繋ぐ。(昭和五・七)

## 歌壇時評

時評を書くやうにこのことであるが、時評とか月評とか云ふものは、私は従  
來依頼されても、凡て忌避して來たのである。吾々よりも、もつと若い人たち  
の書いたものの方が威勢がよくて面白いであらうし、眼も廣く行きわたつてゐ  
やうと思つたからである。で、いざ書くとなると、何を書いてよいのやら、一  
寸見當がつかない。そこで、あれやこれやと思ひ悩んだ揚句、思ひついたのが  
窪田、齋藤二氏の近業のうち、現代の尖端的事象に觸れてゐると思ふものを取  
り上げて、聊か文句をつけて見やうと云ふことである。

しかし、兩氏の作品を鑑賞したり批評したりしやうと云ふのではなく、それをさつ掛けにして、胸中に處理されないで、どろろを捲いてゐる有耶無耶を吐き出してみやうと云ふに過ぎない。

まづ本誌創刊號（短歌研究）に載つてゐる窪田氏の「三越の一室」を見やう

這ひ上がれば上がるがままに廻る車ちか小き縞栗鼠しまりすよ天まで上がるか

車捨てて籠を駈けまはる縞栗鼠のあきらめかぬるかまたも車に

動かではゐられぬ栗鼠の尾をあげて今身を横に今逆しまに

氏の如き老作家がかうしたアンビシラスな態度に出られたのは、一寸瞠目に値ひするやうであるが、氏にはかうした作品が案外にも少くない。さて「三越の一室」一聯十一首の作であるが、題材そのものがそれを要求してゐるやうに、相應に描寫の勝つたものである。そして氏はそれを何時ものやうな情緒の波に

浮べつつ、寫實と云つた風ではなしに、遂げてゐられる。

しかし、近來の氏の作品に見られる——小手先だけと云つた風のものが、これらの作品にも見遁し得ないのは遺憾である。しかし、私はここではそれを問題にしやうとは思はない。

○  
これらの作品によつて、兎に角、吾々は三越の一室の或るデテールだけは感ずることが出来る。しかし、一聯全體として、その背後に醸し出されてゐるミリューは、極めて稀薄な無力なもので、到底あの室に身を置いたものの受ける感じとは似てもつかぬものである。云はばあの一室の二三の現實を、全體のミリューとは没交渉に促へて、それぞれ三四首づつの連作となし、それを一纏にしたものに過ぎない。言換へると、それらの現實は何處にあつても同じだと云ふことになる。それでは吾々には物足らないと云はざるを得ないのである。吾

吾はこの種のものでは、デテールを全幅に浮べたものではないと面白くないと思ふのである。

○

以上は老作家に對して甚だ忌憚なき言であるが、私は氏の作に大きな期待をもつてゐるだけ、それだけ大きな不満を感じるのである。しからば効果のあがらなかつたのは、作品そのものの罪に歸すべきであらうか。云ふまでもなく、此の一聯は所謂詠み難い境地であるし、作そのものの出来映えから云つても、殊に此の作者のものとして、取立てて云ふ程のものではあるまい。それならば他の作者の作品が取つて代り得るかと云ふに、私は容易に肯定しないであらう勿論この場合も、作者に驚異の心をもつと強く動いてゐたら、全體のムードを今少しく強く打出し得たかも知れない。しかし、短歌連作を以て、感情の波のヘッドを捉へて行くと云ふ行き方で、果してかう云ふ境地を生かし得るか何う

かは、よしや如何なる作者がそれを企てたにしろ、私には大きな疑問である。

○

そこで私は長歌と云ふものに考を轉ずる。が、私は此の方面の苦勞を一向にしてゐない。従つて彼是それについて云ふ資格はないわけであるが、漠然と私の感じてゐるところでは、長歌の方が全的に物を浮び出さすに都合がよいのではなからうか。そして今の場合、細部よりも、全體の浮き上つてくれると云ふことの方が遙に面白いのであるから、短歌よりも寧ろ長歌の境地と云ふことが出来ないであらうか。それも人麿式の長歌では、呼吸が餘りにも現代と違つてゐるので、全體のミリュエを出し得ないのであらうが、此の作者の持つてゐられるやうな、自由の形式のものでは、少くともかうした短歌連作の形式よりは、遙かにそれが可能なものではあるまいか。

私は氏が昨年中發表された小長歌に、如何にも自然に現代の呼吸が流れてゐ

と思はれるものを見たから、敢て此の言をなすのである。氏に對しては、勿論釋迦に説法に過ぎないのであるが――

○  
しかし、ほんたうを云ふと、ああ云ふ尖端的な、新奇な現象と云ふものは、短歌の境地でも長歌のでもなく、自由詩の領域に屬するのではなからうか。私は思ふ。ああ云ふ風なものは、生なまな感情を一應殺して――と云ふ短歌定石では駄目なのではないか。寧ろやはりヨーロッパ近代の耽美派の詩人たちが行つたやうに、ムードをリズム化し、そのリズムを直ちに詩のリズムとすると云ふ行き方、即ち一義的な表現の方が、遙かに其處の臭ひをひしひしと吾々に感じさせるのではなからうかと。そしてそれには自由詩に赴く外ないのではあるまいか。

尤も窪田氏の、心の生地を判つさりと出して行かうと云ふ態度には、餘程ま

で自由詩に似たところがある。氏の作品がその格律に於て、追々と散文化して來るのは、少くともその一の主要なる原因を其處に求めることが出來やう。しかし短歌にはなまなか、形式があるだけに、その態度に徹し得ない憾みがあるのではあるまいか。

○  
次に、アララギ八月號の齋藤茂吉氏の心中を歌つた三首が、いろいろな意味で歌壇を驚倒せしめた。今、同號が手許にないから、本誌前號に抄してある二首を引いて見やう。

心中といふ甘たるき語を發音するさへいまいましてわれ老いんとす

抱きつきたる死ぎはの遵合をおもへばむらむらとなりて吾はぶちのめすべし

必ずしも歴史的短歌の概念に執せずとも、これはこれとは驚くの外はないであらう。大體は前號に岡山巖君が鑑賞されたやうでよいと思ふのであるが、餘り

しやに構へて穿鑿立てをしてゐると、著者に嗤はれないとも限らないから、敢て蛇足をそへないことにするが、これらの作品が果して氏の所謂「生命のチーフエ、ブランク」からの叫びであるか、それともむらむらと起つて来た「むら氣」の聲であるかは、一應眞面目に吟味されてよいと思ふ。

○  
しかし、これらの作品が歌壇に投げた波紋は相應に大きい。まづ成可く曲線的描線を棄てて、粗く亂暴に直線的に行かうとしてゐる。純然たる口語的發想法に據つて、書で云へばぶつつけ書きと云ふ行き方である。

これら表現上の用意は生なまな感情を一應殺してと云ふ短歌の定石を蹴つて、生いき肝を掴んでぶつつけやうと云ふ、肉弾的な態度にふさはしいと云つていい。そしてかう云ふ行き方は本來詩の方面のものであるから、自由律の人たちは「今に茂吉も吾黨の軍門に降るであらう」と云ふ悦びを禁じ得なかつたであらう。

又所謂古典派の人たちは、さながら、大歌舞伎の役者が、大時代の科白せりふさいちゆう最中、突如として日常語で話したり、型に嵌つた笑ひをするところを、ゲラゲラと實感味たつぷりな笑ひ方でもしたやうに、狐につままれたやうな感じがしたであらう。

兎に角、茂吉は横紙破りだ。そして不貞腐れつつ歌壇から敬せられ、且つ愛せられる。よくよく得な存在である。

○  
同じくこの第二首のやうな際どいことを詠んでも、氏のものには、やはり何處にか理智の冷たさがあつて、さう云ふ方面では常習犯の吉植氏の場合のやうには肉感的でない。さう云ふ點で幾分救はれるところがある。又「甘たるき語を發音するさへいまいましくなりて」などと云ふつづきや「むらむらとなりて吾は打ちのめすべし」などにも此の人らしきキョトンとした愛嬌があつて、少



々やにつこ過ぎはするが、兎に角、人を微笑させ苦笑させる。もし吉植がナイフな野蠻人であるなら、茂吉は文化的な野蠻人であらう。

○  
ここまで書いて来て、語勢上、どうにも茂吉氏とは呼びにくくなつたから、茂吉と呼び棄てにさせて頂くのであるが、茂吉は七月あたりから脱線氣味で、八月に於て大いに脱線し、九月には又取りすました作を發表してゐる。恐らく社友の見せしめにならぬといふ苦衷もあらうと思ふ。いつたい彼は何うしてこんな鮮かな脱線ぶりを示したのか。これは丁度、吾々野人が嚴めしく禮装して端座してゐたはよいが、その中にしびれが切れて来る。身體がむづむづして来る。もうどうにも遣り切れなくなつて、手足をうんと伸して、一つ大欠伸をしたやうなものではあるまいか。

歌を作つてゐると、實際さういふ衝動に驅られることがある。殊に心熱の異常にもえてゐるもの、時代に強い關心を持つてゐるものには、さう大人しくしてのみはゐられないところがある。

そこで思ふことは、禮服を日常服に着かへて、胡坐をかいてくつろぐことは出来ないかと云ふことである。餘りしびれを切らさないで済むやうにである。しかし、或る程度まで日常服にして行くと、短歌といふ古典的な着物は、とかく見る影もないものになりがちである。そこに吾々のとつちいつの苦心があるしかし、何とかして其處を突破しなくてはならない。(昭和七・一一)

### アララギ諸家の近業について

アララギ二十五周年記念號のよみものとしては、輕きに失する虞れあるもの

であるが、主立つた人々の近業について擅まな感想を記し、文責をふさぎた  
すと思ふ。

夕月の櫻の花の梢にてひかりなきこそしづかなりけれ

岡 麓氏

春の日の須臾しゆゆに聞ければ鉢の牡丹二日かかりておもく開きぬ

中村 憲 吉氏

ここは京鐘の音四方にひびくなり病みのいのちをしましく保つ

土田 耕 平氏

これらの作品からは短歌としてのよさを感得する。岡氏のは、純抒情的なものには、どうかすると、平明よりも寧ろ平俗にちかいものがあると思はれるのであるが、かうした描寫のかつたものは、平淡の裏に慈味があると思ふ。中村氏のは「須臾しゆゆに聞ければ」と云ひ「二日かかりておもく」と云つてゐるあたり

言葉の上の苦勞があり過ぎて、それが讀者には相應に重壓として感じられる。でも晩春の醸してゐる重くるしい、惱ましい氣分と云ふやうなものを感ずることが出来る。岡氏のが淡墨畫ならば之は又こつてりとした極彩色と云つてよいであらう。土田氏のものからは、世外の人と云ふやうな感じを受け、又——さうも言ひ得るものならば——短歌的なロマンチズムと云ふやうなことを思はせられる。つまりクラシズムと結びついたロマンチズムと云ふやうなものをである。そして独自の風格、独自の歌境と云つてよいであらう。

私はこれらの立派な作品は、過去に於けるアララギ諸氏の努力の成果であると思ふ。と同時に向後のアララギに於ける傍流となるのではないかと竊に思ふのである。なぜかと云ふと、これらの藝術のよさは、今から五十年前に比すると、身に沁み方が著しく稀薄になつて、間接にしか胸を搏つて來ないやうになつたからである。或は地方存在の人たちにはさうではないかも知れないの

であるが、近代都市の躁音のうちに喘いでゐる吾等には、さうした感じを禁じ得ないのである。

○ 今更ながら、生活感情と云ふものの力強さに、驚かざるを得ないのである。

○ 又、次のやうな作品がある。

卑怯なるテロリズムは老人の首相の面部にピストルを打つ

齋藤 茂吉氏

吾が兒と行くはこの頃稀なりき大きくなりし手の汗ばめる

土屋 文明氏

近き過去に於けるアララギは、所謂生命の幽遠處(?)と云ふことを狙ひにしてゐたと記憶する。現に上掲の岡氏等のものにもさうした趣がある。つまり宗教家、哲學者、詩人と云ふやうな立場から、人生や自然と云ふものに懸けた

歎きを歌ひ上げてゐる。ところが齋藤氏や土屋氏のは、現實直視の底から生れた、一人の人としての、否、一社會人としての眼前の現實に對する歎きを、啞々とした調子で歌つてゐるのである。

門外漢たる私たちに取つては、アララギ誌上にこの種の作品の擡頭して來たことは、注意に値することである。

○ もちろん、齋藤、土屋兩氏も亦、岡氏その他と共通する作品をも發表してゐる。例へば齋藤氏は

軍の要素なる士官の行爲は單に突撃戦の場合のみと誰かいひたる

かう云ふ記事文の一節を、結句で歌にすりかへたやうなものと同時間處に

あまつ日の白き光のまばゆきに合歡の延ぶるはあはれなりけり

と云ふ同氏の持ち味をはずさり出してはゐるが、岡氏等のグループと通ずると

ころのあるものをも發表してゐる。土屋氏にもそれがある。しかし、かうした兩刀を使ふやうな態度に、私は何等の不思議をも感じないのである。誰にもさうした二面があるのだし、又今の時代そのものに、矛盾と多様性が藏されてゐるからである。

○

齋藤氏の作品に對しては、私はあちらこちらで盲評を試みたから、ここでは餘り觸れないこととするのであるが、同君の作歌の上の狙ひは、今も昔も暗示と云ふことにあらうと思ふ。暗示はつまり象徴である。同君の作の魅力はそこにある。同時に暗示は厭味とも、思はせ振りともなりがちである。同君の作が一面から甚く厭がられるのも亦そこにあらう。土屋氏も亦齋藤氏と同じやうに藝の線が太く、どこか感味の上にバルバリーッシュなところがある。しかし、あんなに才氣縦横な人ではなく、無愛想で、いつも怒氣を含んで呟いてゐるやう

なところがある。さう云ふ點で何處か憶良に似てゐる。そして齋藤氏と共に極めて主觀的傾向の強い人で、どうかすると獨り合點な、客觀性の足りなさがあるやうに思はれる。例へば「腸をやみていまいましき日に利己主義のこと野菜食のことは思ふにものうし」と云ふ風なのに私はそれを感じるのである。しかし、現實直視の眞摯な態度に於ては、土屋氏は齋藤氏よりも上位にあるのではないか。さうした種類の作品はまだよく藝術化されてはゐないやうであるが、同氏には現實を穿ちつらぬく力があるのではないか。兎に角問題とされてよい作家であらう。

○

子規の訓へた寫生と云ふことは、現實にかへれと云ふことであらうから、齋藤氏や土屋氏の歩みは當然なのではあるまいか。もちろん、岡氏その他の扱つてゐられるのも、現實には相違ないのであるが、自然主義勃興時代から云ふと

ころの現實感（ウキルクリヒカイツジン）と云ふものは、生活に即した、暗さを帯びたもので、云はば選ばれた現實である。齋藤氏等の扱つゐてる現實もその種のもので、その點に於て岡氏等のと相違してゐると云へる。

短歌は畢竟、岡氏たちの示してゐられるやうなものが、ちやうどであるかも知れないのであるが、その種のもので追々と吾々に縁遠い、間接的な存在となつて行くと云ふことは、どうにも致し方のないことである。ここでも私は生活感情の根強さを繰り返したいのである。

向後のアララギの主流は、やはり齋藤氏、土屋氏の突進する方向に赴くのではあるまいか。（昭和七・一二）

昭和八年六月十六日印刷  
昭和八年六月二十日發行

定價 壹圓八拾錢

著者 宇都野 研

發行者 東京市神田區淡路町二丁目七番地  
岡村 祐之

印刷者 東京市芝區南佐久間町二丁目九番地  
松坂 兵吉

東京市神田區淡路町二丁目七番地小口ビル

發 兌

岡 倉 書 房

振替東京二五九三五番  
電話神田二〇一〇・二〇一一番

911104  
U 96

終

